ヲ以テ名ク、是救荒本草ノ槭樹ノ類ナルベシ、又花戸ニ漢種ノ楓ト稱スル者アリ、小葉三尖ニシテ兩對ス、嫩葉老葉皆紅、是唐カイデニシテ、眞ノ楓樹ニ非ズ、

〔鹽尻十一〕楓樹圖　楓木は郭璞云、白楊に似て葉圓にして岐あり、時有て香しと云へり、又字書には樹木高大にして葉三角なりと云、我國古書にハカツラと和訓す、中世以來カヘデの紅葉に此字を用ゆるは、似たるを以てにや、予東都にて楓木を見し、紅葉可愛、かしはの如く岐とがらず見ゆれども、大かた一物と覺えはべる、

賢按、楓木の說共に非なり、此時代は總じて產物にうとし、よつて楓木を見たる事なし、いふ所は黃櫨なり、和訓はぢもみぢといふは、せうし也、こるちかし、誤りてはぜといふ、もみぢは見事なれ共楓木にてはなし、今楓樹は喬木にて、東都染井村植木屋伊兵衞方に、享保の大君より拜領の楓樹あり、鷄冠木は黃櫨と別木なり、染井村にある事を知らしむるものなり、又按紅葉は色つく葉の總名なり、

〔古今要覽稿草木〕唐楓

唐楓地綿抄　又からもみぢ花彙と稱するもの、今染井の花戸伊兵衞が園中に存せり、甚大樹にしてその高さ七八丈に及べり、享保十二丁未九月二十二日拜領唐楓といふ札を建たり、其來由を問ふに、御用にて唐土より持渡りしを、嚴命にて其比の伊兵衞深山かべでに五本接しが、殘らず成木して御庭にうつし植させ給ひて、唐土より渡りしもと木を給はりしといへり、伊兵衞家說　その葉三尖にして幅せまく、長みありて對生す、實を結ぶ事鷄冠木の實に似て股せまく、鷄冠木の實より少し大にして、數多く付てたれさがれり、地錦抄に秋の紅葉本色あざやかに洗朱のごとく、又は薄紅黃色さまざまにまじりて、染るといへども、あまりに大木となりし故か、多くは黃色に染てちれり、唐かへて今處々に多くあれども、皆この孫木なるべし、去かれどもその形狀伊兵衞が園